



南町小だより

つよく かしく あたたく

平成31年 2月28日

校長 福田 俊彦

自分の大切さとともに友達の大切さを

校長 福田 俊彦

通りかかった花屋の店先に桃の花を見ることができました。弥生の月、三寒四温を感じつつ、春はもうそこまでという思いがしました。平成30年度の残りも僅かとなり、子供たちの姿からは、進学、進級に向けた心構えをうかがい知ることができます。それも保護者の皆様、地域の皆様に、「みんなの子供をみんなではぐくむ」のもと、ご尽力をいただけたことがあると感謝を申し上げます。

さて、2月は今年度3回目の「ふれあい月間」でした。「ふれあい月間」は、自分の大切さとともに友達の大切さも考えた行動や言葉遣いをすることを重点とする期間です。学校の学習の中でも、休み時間、清掃、給食などの中にも、その場面は多くあります。この南町小だよりを書いている校庭では、5年生が、3年生がサッカーをしています。校庭を走り回る子供のエネルギーは凄いです。互いの頑張りに声を出しています。励ましています。休み時間のことです。ボールが鬼ごっこをしている子供にぶつかってしまいました。投げた子供が近寄っていき、「ごめん。大丈夫。」と声をかけています。「大丈夫。」と答えます。二人の気持ちが通い合っている場面です。このことが二人の関わりを温かくし、互いの心をはぐくんでいることを感じる場面でもありました。他者への気付きは活動に工夫をもたらしています。互いに学び合っているからです。そこには、子供たちの多様な関わりが見られ、子供の成長を促しています。

来月の25日に卒業を迎える6年生は、最上級生としてこの1年間、南町小学校の学校生活を創ってきました。どのような学校にしたいか。みんなとどのように生活したいのか。この思いは言動として現れ、下学年に伝わっていきました。ある休み時間に校長室を訪ねてきた子供は、6年生を送る会の練習について話しました。その中で6年生と別れることを強く感じつつあったのでしょうか。6年生との生活を思い出したのでしょうか。6年生との出来事を語ってる表情は、とても素敵でした。この1年、あこがれの6年生とともに活動したことが、全校朝会で語る6年生の言葉が、どれも大きなもののように思われます。上学年の姿が下学年のあこがれとなることは、南町小学校としてめざしているところで、それを伝統として築き上げてきた6年生はすばらしいです。

平成30年度の学校生活でも、このような場面を大切にしてきました。日々の授業の中での、生活の中での子供の活動の積み重ねが、「自分の大切さとともに他の人の大切さを認める子供」をはぐくむことに、これからもつながっていくことでしょうか。そして、これからも継続することがその質を高めていきます。南町小学校では、今年度までの教育活動から明らかになったことを踏まえ、平成31年度も、全教育活動を通して、互いの大切さを認め合う子供をはぐくむことに尽力をしてみたいです。来年度も「みんなの子供をみんなではぐくむ」ことへのご理解とご協力をお願いいたします。